## 男しかいない街“不夜城”でフィールドワーク

「ここは、男しかいない街だ。この街で今、お前はただ一人の女だ」

これは、私がタンザニアでのフィールドワーク中に言われた言葉です。「えっ！タンザニアには男性しか住んでいない街があるのか」と驚かれたかもしれませんが、そういうわけではありません。そんな街に住みたいと思う男性も、まずほとんどいないでしょう。

### タンザニアの代表的水産物ダガー

私の調査地はタンザニアのタンガニイカ湖とインド洋島嶼地域ザンジバルで、調査対象はダガー漁という漁業です。ダガーとはスワヒリ語で「小魚・雑魚」を表す単語で、小さい魚の総称なので特定の魚種の名前ではありません。タンザニアにはビクトリア湖、タンガニイカ湖、ニャサ湖（マラウィ湖)、インド洋と水域がたくさんあり、いずれの地域でも漁業・水産業が盛んです。上記の各水域ではいずれもダガーと呼ばれるけれど種類の異なる小魚が漁獲され、干物に加工されて国内外に流通しています。タンザニアや周辺国の人々にとって、小魚の干物である乾燥ダガーは安価で重要なタンパク源となっています。

図①タンザニア概略図

ダガー漁は１ヶ月のうち、満月前後の 10 日ほどは行われず、月明かりの少ない暗い夜に集魚灯を用いて行われます。ダガーがどのように獲られ、どのように売られ、そしてどのように加工されて各地へ出荷されるのか、その一連の様子を知りたいと思った私は、まずは獲るところを見に行かねばと、夜のダガー漁船に乗せてもらう交渉をしました。断られるかと思いきや、タンガニイカ湖でもザンジバルでも、漁師さんたちは快く乗船させてくれました。

## 男しかいない街の出現

漁期になると夜のタンガニイカ湖やインド洋上には、たくさんの集魚灯を灯した漁船が浮かんでおり、さながら1つの街を形成しているかのように見えます。どちらの水域でも、漁師さんたちは午後4時〜5時頃に出港し、漁場まで船外機付きの木造ボートで行きます。漁場に着くのはだいたい午後8時頃。漁場に着くと、漁船は集魚灯を灯し、ダガーが光に集まってくるのを待ちます。集魚灯にはプレッシャーランプと呼ばれる灯油を用いた加圧式ランタンが長年用いられてきましたが、近年タンガニイカ湖ではLED集魚灯が、インド洋ではメタルハライド灯と呼ばれる新しい集魚灯が導入されています。

写真①集魚灯を灯す漁師（タンガニイカ湖）

集魚灯の種類は変われど、また、両地域で漁法の違いはあれど、夜の水面を明るく照らし、光に集まる習性のあるダガーを獲ることには変わりはありません。午後8時頃から集魚灯を灯し、人々が寝静まる深夜2時〜3時頃までダガーが集まるのを待ちます。たくさんのいさり火が輝くその光景はまさに不夜城。夜にだけ現れる幻の街、しかも男しかいない街なのです。

## 男しかいない街での心配事

そんな男しかいない不夜城ダガー漁船に乗船するにあたり、タンガニイカ湖畔でもザンジバルでも女性達からとても心配されました。男ばっかりの漁船に女一人で乗り込むなんて危険すぎる、何をされるかわからない。嵐が来て船が転覆したらどうするの？海の上では誰も助けてくれないよ。などなど様々な不安要素を列挙されましたが、私は大して心配していませんでした。女性達のそんな心配をよそに私が心配していたのは、夜の海は寒いだろうなぁ、船酔いするだろうなぁ、あるいは、もし漁船上でトイレに行きたくなったらどうしよう、そんな超現実的な問題でした。何しろ夕方5時頃の出港から、翌朝7時頃の漁村到着まで、12時間を超える長旅になるのですから。車ですら酔うこともあるほど乗り物酔いしやすい私にとっては、船酔いは当然備えるべき問題で、そ

もそもタンガニイカ湖畔の調査地やダルエスサラームからザンジバルへの移動もボートやフェリーなので、酔い止めはいつでも携行しています。寒さ対策としては、水濡れ対策を兼ねて登山用ヤッケの上下を持ち、フリースや靴下もリュックに忍ばせておきました。

タンザニアは熱帯の国とはいえ、季節によっては夜には気温が下がり、海の上でなくとも長袖シャツやフリースが欲しくなる日もあります。特に日本では真夏の 8 月は、南半球のタンザニアでは寒い時期になりますので、8 月の調査時には長袖は必須です。私がダガー漁船に乗船したのは 3 月で、比較的タンザニアでは暑い時期ではありましたが、夜間には昼間よりは気温が下がりますし、海の上では冷たい夜風に当たりっぱなしになるので、防寒対策は必須です。トイレに関しては本当にそういう事態になったらどうしよう、と思いつつも多分大丈夫だろうと楽観的に考えていました。幸い、実際にどちらの調査地でも漁船上でトイレに行きたくなる事態は発生しませんでした。夜の漁船上は寒いので喉はそんなに乾かないし、トイレに行きたくなったら困るので、水分は出来るだけ摂らないようにしていました。また、寒いとトイレに行きたくなるので、持って行ったフリースや登山用ヤッケ、靴下で寒さを感じないよう、むしろ暑いくらいに着込んでいたのも功を奏したのでしょう。

**不夜城が静かに消える時**

午前 2 時半頃、集魚灯にダガーが集まってきたのを確かめると、漁師たちは水揚げの準備を始めます。ダガーを集めたいときには出来るだけ水面を明るく照らし、漁船から離れた場所からもたくさんダガーを集めようとしますが、水揚げ準備に入る時には灯りを徐々に減らして暗くしていきます。それは船を取り囲むように集まってきていたダガーの群れの環を縮めるためです。大きな環で、分散している状態のダガーを、小さな灯りにすることで船の近くにキュッと集めるためです。

写真②集魚灯を灯した一人乗りの灯船とそれを操る漁師（ザンジバル）

1 つずつランプにカバーをかけたり、消灯したりして灯りを減らします。大きな母船から、集魚灯を灯してダガーを集めるための灯船が別に出され、離れたところで集魚するザンジバルの大型漁

船の漁法では、灯船を操作する漁師が灯りを減らして輪を小さくし、母船が近づいていって水揚をします。こうして、漁の終盤にさしかかると、タンガニイカ湖でもザンジバルの海でも夜にだけ現れる街の灯りは一つまた一つと消え始めます。

写真③タモを操り網から少しずつダガーを水揚げする（ザンジバル）

写真④母船へのダガーの水揚げの様子（ザンジバル）

機械化されている日本の漁業の水揚とは違い、全てが人力です。小さくなった灯りの元、漁師たちは声をかけ合いながら網を引きます。私が乗船した日は、タンガニイカ湖では残念ながら漁果は小さかったですが、ザンジバルではまずまずの漁果でした。

## 男しかいない街からの帰還

水揚げと網や漁具の撤収が終わる頃には午前 5 時頃になり、少しずつ空が白んできます。日によってまちまちですが、だいたい午前 7 時〜9 時の間に水揚地の浜に到着し、そこで待ち受けている仲買人たちに水揚げされたダガーは次々と販売されていきます。

私が男しかいない街から無事生還したのを見て、人々は一様に安堵の表情で迎えてくれました。無事帰り着いた後で漁師たちに、出港前に村の女性達から、男ばかりの漁船では何されるかわからないと心配されていたことを話すと、彼らは皆とても憤っていました。

「誰がそんな心配をしていたんだ。俺たちはそんな無法者じゃない！安全だっただろう？　　女たちに言ってやってくれ、俺たちは紳士的な漁師だと」

私はその言葉通り、実際にいかに漁師たちが親切だったか、彼らの漁の姿は勇ましかったかを、調査中に撮影した写真や動画も見せながら伝えました。

写真⑤20Lバケツでダガーを漁船から運び出す(ザンジバル)

写真⑥大漁（ザンジバル）

また、私は帰ってきた後で彼らに「本当は漁船上でトイレに行きたくなったらどうしようって心配してたんだ」と話すと、「俺たちも一番それを心配してたんだ。それで、もしそういう事態になったらどこでどういう風に用を足してもらうか、色々考えてたんだよ」と明かしてくれました。やはりお互い心配しているのは同じことだったのです。男しかいない街でのフィールドワークでは、なかなか言葉に出して相談しにくい問題もあるわけですが、気持ちは皆同じ、事故やトラブルなく、そしてお互いに気持ちよく過ごせるために色々と腐心していたのです。そして、私が彼らを信頼して乗船し、トラブルなく過ごせたことで、漁師たちとの信頼関係はさらに強固なものにすることができました。おかげで、その後、ザンジバルやタンガニイカ湖畔をフィールドワークで訪れるたびに「次はいつ一緒に漁に行く？今夜また一緒に行こうぜ！写真撮ってくれよ！」と声をかえてもらえるようになりました。

新しい集魚灯での操業の様子を見るために、もう一度男しかいない街に出かけないといけないなぁと考えています。

藤本麻里子（ふじもとまりこ）